

## 視点

# 高校での将来への見通しが 大学での力強い成長を促す

●インタビュー  
溝上慎一 京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

みぞかみ・しんいち●1970年生まれ。専門：青年心理学・高等教育。大阪大学大学院人間科学研究科・博士前期課程修了。京都大学博士。京都大学高等教育研究開発推進センター助教を経て現職。著書：『大学生の学び・入門』（有斐閣アルマ）など多数。

パクトを与えているのは、従来の取り組みの制度化だけでなく、コミュニケーション力や思考力などの基礎力（学士力としては汎用的技能や態度・志向性、職業との関連では社会人基礎力）の育成が正課教育の一般の授業にも求められているからです。こうして正課教育の担当教員にとって学生の基礎力養成は、キャリアの一要素として求められるようになったのです。

一般の教員は面倒くさがっていると思いますが、こんな制度化でもなければ、彼らは重い腰を上げません。私はこの法制化は大きな意味があったと思っています。

私は昨年、各地の大学に招かれて「正課教育にキャリア教育がなぜ関係あるのか？」などの話を多くしました。このような機会が増えたことを考えると、本フォーラムの社会的意義も多少は高まっていると言えるのかもしれない。

## 調査結果からわかったこと

——「大学生のキャリア意識調査」からはどんなことが言えますか。

溝上 調査からは、実践に示唆的な結果がいろいろ見出されていま

す。たとえば、私たちは「キャリア意識が高ければ（低ければ）勉強をする（しない）」という仮説を立てたのですが、調査結果からはこの仮説が検証されています。

大学でのFDは、いかに学生に主体的に勉強をさせるか、授業の内容を学生が自らの課題として考えるか、自分とは異なる他者との色々なやりとりを通じていかに主体的に学ぶのが課題になります。

ところがいくらか教員が一教室の中で頑張っても、なかなか学生が変わらないということがあります。例えばどんなに先生が気合いを入れて準備をしても、端から授業から降りている学生がいます。また先生のパフォーマンスに乗せられて授業を積極的に受けても、教室を離れてしまえばトینگダウンする学生がいます。面白ければ興奮するが面白くなければ見るのをやめる、テレビと同じ構図です。

やはり内なる学習意欲、興味関心が育っていないと、学生は本腰を入れて勉強をしません。ですので、教員は授業改善をしっかり行っていかなければなりません。と同時に、状況に依存しない学生の主体的な学習意欲や態度を育

## 「学業とキャリアの架橋」はかる

——2008年からスタートした、京都大学高等教育研究開発推進センターと財団法人電通育英会による「大学生研究フォーラム」が、今年で4年目を迎えます。毎年夏に京都大学で行われるこのフォーラムでは、大学生の「学び」や「キャリア教育」について、高等教育のみならず社会学や心理学、労働経済学などの専門家による議論や、現場での実践など、多様な報告がなされています。このフォーラムを開こうとしたのはなぜですか。

溝上 電通育英会さんから、本センターに「大学生日書を作りませんか」というお話をいただいたことが最初のきっかけです。全国の大学生の姿について示せる調査、データを、というお話でした。

ただ調査結果を報告して盛り上がってそれで終わり、というものがこれまでにいくつもありましたので、私たちは調査結果をもとに大学教育（学業とキャリア）の実践を考えていくことを課題として設定しました。「学業とキャリアとの架橋」という設定は、私がそれ

まで、将来への見通しがあつてこそ日常だ、将来への見通しの有無によって、学生たちの日常生活や学業への向かい方は大きく左右されるということを主張していたからです。

また、私のいるセンターは大学教育に関わる様々な取り組みやFD（ファカルティ・ディベロップメント＝授業改善のための組織的な取り組み）についての研究開発・実践を行っています。本来、FDも学生の実態を調査結果を踏まえてなされるべきものですが、そこまでの取り組みはさほどありません。調査は調査で「学生はみんなこんな様子だね」と理解するだけに留まってしまっています。

こんなことも絡んで、調査結果とともに現場での実践的議論を継続的に行い続けていく「場」として「大学生研究フォーラム」は生まれました。

## 大学設置基準改訂の衝撃

——3年間をどうご覧になりますか。

溝上 色々企画をしましたし、様々な方と交流をしてきましたが、まだこのフォーラムを通して現場に

ていかなければなりません。

調査で明らかにした学生のキャリア意識の高さは、状況に依存しない学生の学習意欲・態度に関連してくるものです。

——具体的にどんなことですか？

溝上 例えば、キャリア意識の高い学生ほど「アクティブラーニング型の授業」を取るという結果です。アクティブラーニング型の授業とは、従来の一方通行型の授業ではなく、学生同士での議論や調べ学習、発表、キャンパス外でのフィールドワークなどを行う授業のことです。これらは「社会人基礎力」や「汎用的技能」の育成につなが

貢献できているという実感は湧きません。

——それは何故ですか？

溝上 大学の正課教育の担当者の参加が少ないのです。毎回の参加者は300人ぐらいですが、正課教育の担当者は40、50人ぐらい、残りの約3分の2はキャリアの関係者です。正課教育の改善を目的とするセンターの性格を考えると、もっと正課教育の担当者の参加者を増やさなければなりません。

ただここに来て、大きな動きも出てきました。昨年2月に改正され、この4月から施行となった大学設置基準の改正、いわゆる「キャリアガイダンス」の法制化です。これまで大学では独自に就職指導やキャリア教育がなされてきましたが、それは国の法律によって制度化されたものではありませんでした。わかりやすく言えば、大学が必要に応じておこなっていたのです。それが中教審答申を受け、大学設置基準の改正という形で制度化されました。これからは、就職指導、キャリア教育（就業力）は大学教育の一環として行うことが義務づけられたと言えます。

しかし、この改正が大きなイン

るものです。

「キャリア意識調査2010」の結果では、キャリア意識の高い学生の7割がアクティブラーニング型の授業を受講していたのに対し、キャリア意識の低い学生はたった2割しか受講していませんでした。

日本の多くの大学ではアクティブラーニング型の授業は選択科目です。それを敢えて選択するマインドが、自分の将来をしっかり考えていることや、将来に向けて日々頑張るといったキャリア意識であると推測されるのです。

例えば京大の目玉プロジェクト





●大学生研究フォーラム2011(於 京都大学)

第一日目	8月1日	10:00~17:30
シンポジウム 「現代大学生の学びとキャリアをデータと実践を架橋して理解する」など		
第二日目	8月2日	10:00~
「高校生の学びとキャリアを高大接続の観点から考える(仮題)」		

しなし「不理解」の者の半数はそのまま卒業まで行ってしまふことを示唆しています。

先生方の中には1年生からキャリア教育をする必要はない、就活を迎えたらちゃんと彼らは気持ち切り替えて将来を考える、とおっしゃいますが、半数(この数字は高いものです)はそのまま切り替えられずにずるずると行ってしまふことを、データは示しています。また、「見通しなし」や「不理解」の学生たちの学習意欲や態度が最低限の勉強しかしない、受け身のものであることや、先ほどのアクティブラーニング型の授業を取らないなどの特徴を持つことを考え



「大学以前」が問われる  
——こうした内容を求めて議論されるのが、今年8月の「大学生研究フォーラム2011」ですね。

に1年次の「ポケットゼミ」という少数教育があります。これは選択科目です。1年生3000人のうちこの科目を取るのは1500人で、残りの1500人は取りません。「面倒くさい」と思うか、「面倒くさくても受けておいたほうが自分のためになる」と思うか、このマインドの差異にキャリア意識が絡んでいると考えられます。

ると、3年生の終わり近くになって就活を終えて「理解実行」「理解不実行」へと移行するのでは遅すぎる、彼らは大学時代何を学んだのか、という問題が浮上します。いずれにしても、キャリア意識というのはなかなか変わらないことを理解して欲しいと思います。

ちなみに、1年生時の「理解実行」群は就活の結果も、他の群に比べて、第一志望の就職先に内定をもらう確率が高くなっています。学業だけでなく、いろいろな活動へのプラスの効果を見て取れる基盤数だと理解されます。

——高校ですべきことは？

溝上 進路指導に「キャリア教育・形成支援」をしっかりと入れていくことに尽きます。高校生のバージョンでいいので、将来やりたいことと、そのために●大学●学部へ進学することをしっかり考えさせることです。

現実には、高校でどんなに将来のことを考えて入ってきてても大学に入れば、変わります。大学では色々な世界が見えてくるし、高校とは違う質の友人との出会いで異なる価値観も芽生えてきますから。ただその時に土台が無いと、新たに

——高校の進路指導として特に注目のべきことは何ですか。

溝上 大学は学生を成長させるためにさまざまな努力をしています。が、他方で学生のキャリア意識の弱さに足を引っ張られています。学業とキャリアとが密接に関連していることは、すでに述べてきたとおりです。

——高校と大学をつなげる試みもありますか。

溝上 実は2008年のフォーラムでも、広島市の公立高校の先生に高校での進路指導やキャリア教育について発表してもらっています。それを今年をもっと本格的に発展させます。

今年2日目に高校の先生方だけを対象としたプログラムを設けます。

溝上 私たちは3年を1つのサイクルで考えていて、今年は1年目の年に戻ります。先に触れた「大学生のキャリア意識調査2010」および「大学生のキャリア意識調査2007追跡」の報告を柱に、「学業とキャリアとの架橋」について、様々な立場から私たちの問題意識やこれまでの取り組みをもう一度確認していく予定です。

に形を作ることができないのです。

私はよく粘土の例で言うのですが、いきなり良い作品を作ろうと思っても作れない。ある程度の形を作っておけば、後はディテールの作業です。良い作品はディテールの過程で仕上げられていくものです。この「ある程度の形」は高校生で言えば、「何を勉強したくてこの大学・学部に入るのか」です。形があれば「こうじゃない」と言えますが、形がなければどうしようもないですよ。

——高校までに将来への意識を培うことが非常に重要なですね。

溝上 18、20歳まで育って、良くも悪くも形が仕上がってしまっている学生たちを、そこからどう変えようというのか。学生の基盤を作っているのは大学以前の姿です。

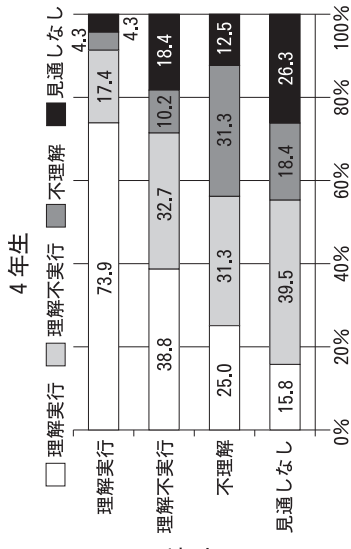
将来を考えたり、勉強を日々積み重ねたりする態度、日々の過ごし方などは「心理的」なものです。その気になったらいつでもできるものと言われますが、その気にならないのが人なのです。このあたりは、人の行動をかなり基底部分で規定するパーソナリティとして理解されています。

そして、学生のキャリア意識は4年間なかなか変わらない。そうなると、学生は将来への見通しをしっかりと持って大学へ入学してくることが重要な示唆となります。

「キャリア意識調査2007追跡」の結果の中に、図のようないままとめたものです。まず、大学1年生の時のキャリア意識の回答から、学生を以下の4群に分類します。

①「理解実行」群：将来の見通しを持っていて、その実現に向けて日々何を頑張ればいいのかを理解しそれを実行している者、②「理解不実行」群：将来の見通しを持っていて、その実現に向けて日々何を頑張ればいいのかを理解しているが実行できていない者、③「不理解」群：将来の見通しを持っていて、何を頑張ればいいのか理解できていない者、④「見通しなし」群：将来の見通しを持っていない

図表 3年後の2つのライフ(1→4年生)



(注1) データは、京都大学高等教育研究開発推進センター・(財)電通有共研「大学生のキャリア意識調査2007追跡2010」による(データの詳細は「はじめに」を参照)。  
(注2) ピアソンの $\chi^2$ 検定の結果、1%水準で有意差が認められた( $\chi^2(9) = 26.213, p < 0.1$ )。残差分析の結果、有意に多く認められたセルは、「理解実行(1年生)×理解実行(4年生)」「不理解(1年生)×不理解(4年生)」であった。

1年生者。次いで、彼らが4年生になったときにもう一度同じ質問を行い、同じように分類を行います。図はそれらをクロス集計したものです。図を見ますと、「理解実行」群の4年間の高い安定性が見て取れます(73.9%)。他方で、「見通しなし」「不理解」群を見ますと、4年後「理解実行」「理解不実行」へと移行している者が半数いますが(これの主な理由は就活です)、残りの半数はそのまま「見通しなし」「不理解」へと留まっています。つまり、1年生の時に「見通

とでいいので、やれることを怠らずにやっていくことが大切です。高校で言えば、「基礎学力をつけること」と「将来への意識をしっかりと作ること」です。

——やはり基礎学力も、重要だ。

溝上 「高校までの勉強が将来役に立たない」と言って大学に入る人は、入学後も本当に役に立つ勉強はできません。なぜなら、役立つ勉強をしたと思った時に、基礎的な科目の知識がなければできないからです。例えば心理学では統計学が必要ですが、数学をやっていない学生はついていけません。国語も英語も同様です。基礎学力は将来、やりたいものを現実に見えない基盤になっていくのです。

——最後に高校の先生方にメッセージをお願いします。

溝上 今年の大学生研究フォーラムは、高校生の学びとキャリアを高大接続の観点から捉えるものです。ぜひ多くの先生方にご参加いただき、高校現場から大学に向けての声を発信いただければ願っています。(大学生研究フォーラム2011の詳細は <http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/> を参照のこと)。